

## 十文字学園女子大学講演会

# 『新しい時代に生きる子どもをどう育てるか』

## —教育における発想の転換— (1)

首藤 美香子 編

暮れも押し迫った二〇〇四年十二月、堀合文子十文字学園女子大学客員教授・本田和子お茶の水女子大学学長をお招きして、十文字学園女子大学にて、特別講演会

『新しい時代に生きる子どもをどう育てるか—教育における発想の転換—』が開催されました。保育の現場や研

究において長年にわたりご活躍なされた両先生の、豊かな経験からあふれる貴重なお話の数々を、数回にわたり、ご紹介します。今回は堀合先生のお話です。

堀合先生は東京女子高等師範学校にて倉橋惣三に師事された後、一九四〇年より同附属幼稚園（現お茶の水女

子大学附属幼稚園)にて保育に従事され、教頭を務められたのち、一九八六年にご退官後は十文字幼稚園の主事として二〇〇四年三月まで、実に半世紀を越えて保育の第一線で多くの子どもたちのご指導にあたられてきました。今回の講演では、聴衆の多くが保育関係者であることにご配慮され、慎重に言葉を選ばれ直截な批判となることを巧妙に避けつつも、堀合先生の実感として、近年の子どもは確実に昔と異なること、その現実を保育者はどれだけ自覚しているのか、また新しい時代に見合う保育を構築するため日々十分努力がなされているか、強い危機意識に基づいた問題提議がありました。

少子化に伴う子どもをめぐる人間関係の変化、大量消費と情報化が加速する社会、学校や家庭、地域の教育力の低下、児童虐待や犯罪の多発など生活環境の動揺など、混乱する近年の保育状況に対し、保育現場では問題解決に向けた様々な取り組みが模索されてきています。堀合先生の厳しいご指摘は、保育者が「新しい時代に生きる子ども」をどのように理解し、保育の根本は堅持し

ながらも日々の実践のあり方をどう改革していくべきか、まさしく発想の転換を迫るものであったといえます。それに対しては様々な立場から異論もあるでしょうが、子どもと大人の関係再構築をめざす方々の実践の一助となると思われます。紙数の都合で、内容が重複する後半の三分の一は割愛させていただきますが、現場という具体の地平から敢えて離陸せず、日常の平易な言葉でもって重ねられる深い思索の道程を、読者の皆様にも追体験していただければ幸いです。(以下講演内容)

### 子どもは変わったという実感

私にも若い時がありました。ずっとやっておりました。長いものですからね、いろいろなことをいたしました。昔は……今とは全然違いますから。こちらからいろいろと「今日はこうしましょう」「その次は、みんなで椅子を持ってきて、ピアノのそばにきてね」とか、「今度は広いお部屋に行ってお遊戯しましょう」と言っていて、『みんなで』、いわゆる『みんなで』ですよ。先生の

方が考えた計画をいろいろと一日の中でやっていく、そういうのが私の保育でしたね。いろいろな物ができてみたり、絵本を持ってきてお話をしたり、そんなことは、先生方はおわかりだと思えますから、いちいち申し上げませんけれど。そういうのが私の若い時のお子さんに対する保育だったのです。

時代がどんどん変わってきますと……今のお子さんは全然前と違う、当たり前ですわね。それこそ、私が何十年の経験がありますから、その間に変化しないというのはおかしいので。それこそ、私が三月までさせていただけだったので、そのお子さんというのは本当に違っています。「おかしいな、これでいいのかな」、と思いつながら過ごさせていただきましたけれど。それこそ若い時代は、みんなで座ってとか、おにごっこしてみたり、一緒になって滑ってみたりブランコに乗ってみたり、そういう方が良い先生だったわけです。それが、お子さんにも、決して間違いでなかった。ところがこの三月では、それだけのギャップがありまして、一緒に遊ぶんですけれ



ど、それよりも、もっともとお子さんの方がいい考えをして遊んでくれる。私が何も「おにごっこしましょうよ」なんて言わなくなつて、ちゃんと自分たちで考えて遊ぶ。

でも、それは入園当初からそういうわけではないのですけれどね。年毎に、対し方を変えていかなとお子さんが逆に変な顔をして見ますから、私が何か前と同じにやっていたのじゃダメなんだと、「もう嫌」というほど、お子さんの方から教えてもらってますから。ですからそういうことはできないわけです。それで、私も最後のクラスは三年間持たせていただきましたから、三歳から、「あら、今度の人たちは何だか違うわ」、と思つて一緒に生活していて……あの、それが今申し上げたような、

もちろん先生の計画の方向へもってゆくこともせず一緒に  
行かない方が何かいいみたい。

### 今日の幼児教育のむずかしさ

そのかわり、ただ、ご存知だと思いますが、幼児教育  
は『遊ぶ』という生活が一番大事で、それが根本でござ  
いますから、それはもうちゃんと踏まえて、そしてその  
遊ぶお子さんたちの生活をみていても、前に申し上げた  
ような形で私どもが出て行き一緒に遊んだりするといけ  
ないこともわかりました。今度出ていかないという傍  
観者立場になって、何もしないでただ見てたんじゃ、  
我々の仕事というものは無くなってしまいますね。だか  
ら、そこらへんが、まあ、大変むずかしくなった、(むずか  
しい)幼児教育になったということをすごく感じました。  
ただ黙って、お子さんが、けがをしないように無事に  
遊んでいるなど見ているだけ、外観からだと思っているだ  
けに見えるのです。だけでも逆に、その神経の使い方  
が、それこそ頭の上から足の先まで全部の神経を使って

いかないと、今のお子さんたちはダメなのです。何しろ  
体を使って一緒に動いていくのじゃなくて、体は  
使えけれども、こちらの保育者の使い方が違うといよ  
うに変化してきました。

もう一つは、一人ひとりと相対していくというのが根  
本の問題ですから、私は(昔から)同じようにやってい  
たけれども、(今は)何かこちらに要求してくることが  
違う。それは、いろいろな面で先生方もご存知かもしれ  
ないけれど、(今のお子さんは)何でもやってほしい。  
今まではというより昔は、お子さんに何とか上手に、こ  
ちら側からさせられているという形じゃなくても、知ら  
ないうちにお子さんの方が、自分でいろんなことができ  
るようになるような方向にもっていくというやり方で  
やってきました。が、今のお子さんはそれでは満足しな  
いで、「もろにやってほしい」という目を私どもに向け  
ますものですから。それが一番、最近のお子さんを感じ  
たことです。

別に、「あなたにできるでしょ」「やってごらんなさ

い」「ちゃんと見てあげることね」、そんなことは昔の話で、今は何でも。というのには「朝、おはようございます」と来て、今の時期でしたら、コートでも何でもそれこそ何の抵抗もなく、言葉も言わないかもしれないけれども、脱がしてあげて「さあ行きましょう」と。そのへんに、今と昔の違いがあるのですね。

無条件に何でもしてあげて、

『心から心でもって、心を育てる』

それだけ今のお子さんというのは、世の中が騒がしくなつて、お子さんにも生まれた時からいろんな刺激が押し寄せているので、お子さんの方も本当に神経をとがらして成長してきて、そしてまた、いろんな面も吸収も早し、そこいらが随分違っているのは当然なんですけども。それをすごく感じたので、途中から、何でも私が無条件に（この言い方は無責任かもしれないけれど）、無条件と同じくらいに何でもしてあげましょう、「やって」と言ってくるのは当然、やってあげますけれど、ちよつ

と困っているような時でも、手を貸してあげる。ちよつと忘れていたようなことも、「みんな忘れてるんじゃない」「忘れてるわよ」ではなくて、全部こちらがしてあげる。

これはどういうことかというのと、お子さんが何かを本当に訴えているような感じを受けたので、今のお子さんというのは、いろんなこと、表面のことを教育するよりも（こういうことをうまくいえないですが）、本当にお子さんの心、お子さんの心はすなわち人間の心ですから、心、というものは何か随分生まれてからすぐいろいろな刺激を受けて何年前よりも、はるかにたくさん刺激を受けて育つてますから、それだけ「心というものが満足して育つてはいないんじゃないかな」、ということを感じましたものですから。まず私は、「今のお子さんというのは、心を育ててあげなければならぬのじゃないか」。それには、私ども保育者がまず心を、もちろんこちらにも修養しなくてはいけないが、『心から心でもって心を教育していく』というような、こちらにも気持ちを持

十分に出してあげて。極端に言えば、それしかないみたいなように今は考えている。今振り返ってみると、極端だったのかなと思いますけれど、今は、こういう世の中ではそれがいいと自分なりに考えております。

### 昔の保育と今は違う、

#### そのことを自覚してほしい

昔の保育とは違う、ということなのです。今は『何を『する』ではなく、お子さんが園に来て自分の生活を十分にしている、その中で必要なことだけを私どもが保育者としていけないことはいけない、良いことは褒める、そんなことはちゃんとして、後は『ほとんどお子さんからの要求を十分に受け入れてあげる』。今申し上げたみたいに、必要な、例えばコートのことのように、こちら（保育者）が気を利かせてやるといふことです。口でもってお子さんばかりさせるのではなく、させるといふことは、いろんなやり方があるが上手にやればいいのでしょうが、いくら上手にやっても現代のお子さんに大して必要

ないと思います。

私が若い時していたようなことは、（今も）保育室の中にいっぱい見られる。「それでいいのかしら」と、時々生意気なことを思っていますけれど。それくらい今のお子さんは変わってるんです。ただ、「変わってる、変わってる」と言っても、やっぱり何かそこには幼児教育というものがちゃんと確立していかなくちゃいけないのですけれど。ただそれがはつきりと前にでません。

……だから私は、とてもむずかしいと思います。逆に、前に比べてね。「してごらんなさい」ということは言わないまでも、何となく優しい誘導していくやり方にしても（そういうことは易しいです）、だけどそういうことはしないで、お子さんの方から出るのを待ってて、それに對して、一生懸命、それこそ小さなことがだんだんだんだん発展していくところまでもっていつてあげるといふやり方はとてもむずかしいと思います。相当保育者がある頭を使って、神経も使って、体が先だったです。そこからへんが、私は言葉としてお話するのもむずかしいけ

ど、やる方もむずかしいです。だから、いろいろなお話をきいて、背後にいらっしやるお母さまたちから要求があるからとか、何だからとよく伺いますが、私はそれよりもお子さんが大事です。

### 保育の根本は変わらない

本当に今なら今の教育をしておいてあげないと大変なことになります。さつきから、『心』、『心』、と。

『心』は見えませんがね。私どもに見えないから、それを見ようとする、そこにもうまざるむずかしさもあるし、そこを大事にしてそれを満足させてあげて、それから、それでいて『お子さんたちが自分からいろいろ考えて行動していくような人間』に向かつていってほしいな、その人間に幼児期にすつかり完成するわけにはいかないけれど、そういう方向に向かつていってもらったらいいじゃないかなと。〃自分からいろいろと考えて〃というの、根本の問題でこれは昔から変わりません。同じですが、特に今は割合とさつきも申し上げてしつこい

ようですが、いろんな情報もあるし、いろんな音もあるし、いろんな言葉もあるし、いろんな物がある中の方たちが赤ちゃんから育てていますから、割と受け身が多い。だから園に来た時くらいは『自分というものを出す』ような機会をこちらで作ってあげないと、それこそ大変な人間になって、判断もつかない、自分たちの頭で考えることもしないような、それから人の指示を待っているような、極端に言えばそんなようなお子さんができてしまいますから。

特に今は（昔もそうですが）、根本の目的は同じだが、そこがお子さんが違うというのは、そこにあるのですから、我々の努力の仕方がだいたい現場では違っていかなくちゃいけないのじゃないかなと、いつも思っております。それで『目に見えない物を大事にしなくちゃいけない』、これも昔から大事にしていけないわけではないけれど、特にそこを大事にしなきゃならない今の時代にかけているということ（です）。それを見抜くように、各自努力しなきゃならないことです。

心を見る、

### 具体的に何を要求しているか見抜く

『心』、『心』とばかり言っておりませけれどそうじゃない、具体的に何を要求しているんだろうということ、一生懸命見抜くためには、私の場合、それはお子さんを見なきゃなりません。本当に今の時代は、何とこのでしょう。お子さんが、すごい……先生に対して乱暴。普通のお子さんのクラスですよ。乱暴ってね、わざと自分に向けてほしいわけですから、ぶつというわけではないですけど、足でやったり、お友だちにやられるとちよつといろいろな大変だし、だけど、我々にやってくれる分にはいいのですけれど、口に出して言ってくれればいいのですけれど、以上のような形でもって、お子さんたちは、「まだ先生たちはわからないのか」「こういうことを頼んでいるのに」と、口で言わないで、私どもが考える以上のことを考えてやってくれます。

でも一応、こちらから、やつぱり『向こうが心として

要求しているならば、こちらも心でもって返してあげないとお子さんも育っていかないんじゃないかな』。(中略)『心』だとか、いろいろ言いましたけれど、目に見えないお子さんとのこと、私どもと見えないつながり、つながりならいいですけども。つながりもできないでやったら大変なことだしね。何か、そこには火花が散っていると思うのです。特に今のお子さんはね。先生に対してけつたり、乱暴してみたり、先生がわかってくれないと思つてやつていられるのかもしれないし、そこらへんはわからないですけど、それを見抜いていくのが私どもの大きな仕事だと思います。(以下略)

### ◇司会者からの質問

「なぜ、堀合先生はお子さんの訴えが見えるのですか。なぜ、子どもたちは堀合先生にはそこをあらわしてくれるのに、他の先生方は気付かず、そのことに抵抗も感じないで過ごしてしまっている(のでしょう)。堀合先生はなぜ、(子どもの訴えが)わかるのでしょうか。極意と



いいですか、これからの若い方々に、堀合先生のような感性が持てるためにどんなことが大事か補足を」

保育者は『無』になること、

『自分を意識しない』ということ

これは、すぐにできるわけではない。担任の交替があるので仕方がないということは知っていますが、一番普通のやり方は三歳・四歳・五歳と持つのが普通と思っておりますが、その場ですぐできるそんな神様みたいなことはできない。お子さんが入園した時から覚悟して、と言ったら、おかしいですけど、覚悟してお預かりする。いろんな細かいこと事務的なことも。ずっとつなげてみて、つなげなくても、一日でも、お子さんと対する時の保育者の心構えは、『自分を意識しない』ということ。

『無』という言葉がありますでしょ。どの保育者だからどうというんじゃない、お子さんを預かったら保育者は、

無にならないとできない。自分を無くす。「おはようございます」と一人来た時から保育は始まる（全員来てからということではなく）。

保育者とお子さんの関係が、『無』でないとなかなかできない。自分を無くしてお子さんをよく見る。よく見るだけでなく、幼稚園ではいろんなことがある。ここだけ見ているだけじゃダメ。後ろにも目がないとダメ。横ももちろんそうだし。それが頭の前から足の先というわけで、背中にも神経がないとやっていけない。使っていると自分というものは無いんです。だけど本当に無くなつては、それはかえってダメになるかも知れませんが、ここは解釈して頂きたいのですが……。

まず、子どもと通じること

「先生、電話ですよ」とか「ああそう電話」なんて言っ



たら大きな穴が空いちやいますでしょ。そのことだけを  
考えて一日を過ごさないと、『お子さんと通じる』こと  
はできないのですよね。お子さんと通じることがまずで  
きないと、そこに教育がでてこない。お子さんが（入園  
した）四月のはじめから努力して。はじめはお子さんの  
方がそっぽ、知らない人ですからね。振り向いてもくれ  
ません。振り向いてもくれませんよね。振り向いてくれ  
ない子どもを、一人一人つながりができるように努力す  
ること。これができれば、『無』になることができる。  
私の方を見てくれるお子さんの方も努力していると思っ  
ます。

自分を無くさないと、それだから見えるということでは  
ないが、何か感じてくるのだと思うのです。「こうか  
な」、「ああかな」と、こちらも働かせて、ただ見ている  
わけにはいきませんから。「こうかしら」、「あの人はこ  
うなのかしら」と、こちらがわからなければわからない  
ほどそういう努力をしてみないと。「ただ、こうだから

こう」、じゃなくて、やっぱり自分というものをいろいろ  
る保育者自身を変えていって、「やってみただけど良いか  
しら、やっぱりダメだ」と考えたり想像したりしてい  
かないと。はつきり見えて、「さあこれをいたしまし  
ょうじゃない」、ということはおわかるのです。

保育者はお子さんの持っている能力をそれぞれ引き出  
してあげるのが最終の望でしょう。能力を種々使わせる  
のは幼児期には必要ないのですが人によってはそろそろ  
自分の能力を使い始める場合があるので、それをよくみ  
て、よく感じて、次は我々先生の頭を使って処理すべ  
きでしょう。

人間としてお子さんの方がはるかに時代に合わせて進  
歩しているので教育の場ではそれをこわすことなく、引  
出し伸ばす方向に持っていくのが私どもの今の幼児教育  
ではないでしょうか。